海がきこえる

▶気まずくなりたくないから。優しい気分のままでいたいから……

いった紙袋を振りまわしながらアパートに帰った。ぼくの部屋のドアの横に、津村知沙が立っていた。

「どこ行ってたのよ」

「え、武藤のところに行ったんですよ」

　津村知沙の登場があまりに急だったせいで、ぼくはトンチンカンなことをいってしまった。もちろん、すぐに気がついた。彼女はただコインランドリーとか、パチンコ屋だとかいう意味で聞いただけだったのだ。なのに、ぼくがいきなり、里伽子の名前をだしたものだから、びっくりしたらしい。

「なんだ、リカちゃんのところ行ったのか」

　津村知沙はむっつりといって、おもしろくなさそうに顔をしかめて、

「じゃあ、帰るわ」

　といったきり、ぼくの横をさっと通りすぎようとして立ちどまり、ふいに頭で、ぼくの頭をこづくようにして依りかかってきた。

「こんなに早く、うまくいっちゃったのか。残念だな」

　津村知沙は心底、悔しそうだった。ぼくはなんといっていいのかわからず、知沙の体重でよろけないために、足を踏んばった。けっこう重かったのだ。

　今日は里伽子に会えて嬉しかった。優しい気持ちになれたし、その気持ちのままで終りたかった。津村知沙を押し返さないのはそのためだ。気まずくなりたくないから。優しい気分のままでいたいからだ……。

　津村知沙は1分くらい、そうしていたかと思うと、ふいに体を起こして、

「帰るわ」

　といって、ふり返りもせずにスタスタと歩いて、あっというまに角を曲がってしまった。

　ぼくは内心、汗びっしょりになりながら、ともかくアパートの連中に見られなかったのはよかったと、いかにも小心者が考えそうなことを考えながら、部屋に入った。

〈つづく〉

この作品の感想、氷室さん、近藤さんへのファンレターは　〒105-55　東京都港区新橋4の10の1　徳間書店　アニメージュ編集部「海がきこえる」係まで　どうぞ